

すがめ 眇目読み『注文の多い料理店』論

『注文の多い料理店』の中の「注文の多い料理店」の中の
注文の多い料理店……

天 沢 退 二 郎

はじめに

宮沢賢治の童話集『注文の多い料理店』には、その中の一篇として「注文の多い料理店」があり、その作中には「注文の多い料理店」がいく通りも出てくる……。このような構造はもちろん、多くの童話集、詩集、小説集……等に非常にしばしば見られるもので、珍しくも何ともないのだし、さらにいえば、もつと多種多様な「入れ子」構造の中の平凡な一型にすぎない。しかし、このような構造の内実に立ち入ってみると、その意味や役割はこれまた一様ではなく、『注文の多い料理店』の場合、そこからある「正体」を抜き出すことができる。ここに一文を草する所以である。

料理店であること

まず、『注文の多い料理店』とは、この童話集全体の総題である。総題と、本全体との関係はというと、大別すれば、単に収録作品の中の任意の一篇のタイトルをもつてきて、総題としたのか、あるいは、この総題が、他の収録作品のすべてあるいは大半と、程度の差こそあれ、内容的に関わっているために選ばれたか、この二つが考えられよう。『注文の多い料理店』の場合はどうか。

すでに知られているように、この童話集の総題としては、少くとももう一つ別の案が先行していた。童話集が刊行されたのは奥付によれば一九二四年（大正十三年）十二月一日、これに

対して、近森善一著『蠅と蚊と蚤』(大正十二年十二月十日発行)にはさみこまれていた図書注文振替用紙裏面には、「近刊予告」として、

少年文學 宮澤賢治著

山男の四月

發行豫定四月中
定價 金壹圓

近刊 しゃばばの夜
「しゃばばの夜」は、南の山嶽の群青いろをしたところに落ちてから、野はらは、へんにさびしくなつて、白樺の幹などもなにか粉を噴いてる様に見えました。
清作はさあ日暮だぞ、日暮だぞと云ひながら、神の根もとに、せつせと土をかけてみましたら、いきなり、向ふの柏はやしの方から、まるで調子はづれの途方もない變な聲で、
「鬱金しやつほのカンカラカンのカアン」とどなるのが聞えました。
清作はびびりして顔いろを變へ、喉をなげすてて、

が、「かしはばやし」の冒頭の一節をあしらつて広告されており(新校本全集第十一巻校異篇八頁)、童話集が実際に刊行される約一年前の時点では、『山男の四月』が総題として予定されていたことがわかる。

賢治自身が、刊行前に考えを変えて『注文の』にしたのか、それとも『山男の』はもしかして刊行者の近森・及川側が、賢治から預かつていた総題未定の童話集印刷用原稿束に、勝手にまたはとりあえず、『山男の』を総題にえらんで広告を開始したのを、のちに作者が改定したのかは、さしあたって不明であるというほかはないが、いずれにせよ、『注文の』は、

賢治自身の意向にそつて最終的に決定されたものと推測できる。次に、童話集冒頭に掲げられた自序もまた、総題の意図と照応している。

「わたしたちは、氷砂糖をほしいくらぬもたないでも、きれいにすきとほつた風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。」

と書き出されるこの「序」は、徹頭徹尾、飲食物の喩を用いることで一貫しており、基本的に物語が食品として提供されているのであるから、『注文の多い料理店』というこの一冊の書物が料理店であることは明白である。(注1)

「注文の多い料理店」の含意

さて、以上もまた当り前といえは当り前な贅言であるけれども、これを踏み台として、『注文の多い料理店』を構成する九篇のうち、「注文の多い料理店」以外の八篇もまたそれぞれに料理店であろうか? それらはいかなる料理店か? もしかしてそれらもまた注文の多い料理店であろうか? これをみていくとき、いかなる結論がみちびかれるであろうか?

しかしそれに先立ち、まず、標題作である「注文の多い料理店」一篇における注文の多い料理店の含意を整理しておきたい。

それはだいたいの山奥で、道がわからなくなり、案内人の獵師

もどこかへ行つてしまつてまつたくとほうにくれた二人の紳士が、それにおなかもすいてきて、

「何かたべたいなあ」「喰べたいもんだなあ」と言いかわしたその時、背後に出現した建物の玄関に出ていた札にははつきり、「西洋料理店」とあつた。よろこんだ二人を迎えて、硝子の開き戸、中へ入るとその扉の裏に、それぞれ金文字の文句が書かれ、廊下を行くと次のペンキ塗りの扉の上に、黄いろな文字で「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

と書いてある。ここが、物語における注文の多い料理店というタームの初出である。つまり、この店の店主、あるいは店側は、この店が注文の多い料理店であることをのっけから、しかも自分から、客側に対して宣言し、あるいは宣告しているのであつて、それは「どうかそこはご承知ください」という付言によつて念押しされ、「このさきどうなつても、そちらの責任ですよ」という、法的根拠明示の手が、あらかじめ打つてあるわけである。さらに、この時点ではまだ、二人にも読者にも、見抜くことはできないのだが、この記文の末尾の、「ご承知ください」という懇請文つまり婉曲な命令文は、これ自体がすでに、客側への注文であることを示していたのであつた。

廊下を行くと、次にまた扉があつて、記文があり、その指示にしたがつて次の廊下を行くと、また扉があつて記文があ

り……というぐあいには物語は説話的構造で進んでいく。それらの記文はすべて、「……してください」という命令文の連続である。

二人の紳士が最初、「注文の多い料理店」という、店側の宣言に与えた解釈は「客たちの注文が多い」とてもはやっている店」というものであつた。だから二人は、いそいそと、記文の指示にしたがつてきたのだが、「料理はもうすぐできます（……）すぐたべられます」とか、さらに「いろいろ注文が多くてうるさかつたでしょう」という記文にいたつてついに、「注文というのは向こうがこつちへ注文してるんだ」ということに気づき、のみならずもう一歩ふみこんで、「ここは自分たちを「料理にして食べてやる家」であることまで気づくにいたる。つまり、この物語の注文の多い料理店というタームの「コノテーション」として、

注文	料理	店
客側からの注文 店側からの注文	客に料理を作つてやり 客を料理してやり	客に食べさせる店 客を食べてやる店

という、三重の両義性を組み合わせただけの含意が準備されていたのであって、まさしく店側の《看板にいつわりはなかった》のであった。この物語の中には注文の多い料理店がいく通りも出てくる。と冒頭に書いておいたのは、このことである。

要するにこの「注文の多い料理店」という一篇は、客側がこの注文の多い料理店の複数の含意の中でどれが店側の真意であったかをささるまでの物語であったということになる。

「どぶぐり」山猫から「鹿踊りのはじまり」まで

では他の諸篇はどのように料理店であるかを瞥見しよう。「どぶぐり」山猫「これはまず最初にある土曜日の夕方、一郎のうちに来た「おかしなはがき」の最後のひとこと

「どぶぐりもたないでくなせ」

とあるのが、明らかに「山ねこ」から一郎への注文であり、これはあの二人の紳士への注文のひとつ

「鉄砲と弾丸をここに置いてください」

に対応していることからして、「注文の多い料理店」の姉妹篇である気配は濃厚だといふべきであり、山猫に先立って一郎を迎えた馬車別当の足さきが「ごはんをもるへらのかたちだった」とあるのも、「ここがむしろ和食のレストランらしいことをほのめかしている」。

しかしそれよりも、この料理店ならぬ裁判所(？)が、一郎に

「めんどなさいばんしますから、おいでんなさい」と、来廷するよう注文し、いかにもめんどなさいばんの現場を逐一見せたあとで、

「どぶぐりいいでせう」

と、解決策を注文したあげく、今日のお礼として、

「あなたは黄金(きん)のどぶぐり一升と、塩鮭のあたまと、どっちをおすきですか。」

と、テレビの『どぶぐりの料理ショー』もどきに、『ご注文は、どっち!』と問うてくるのは、あたかも、ここは《お客に注文させる》お店でもあるかのように見える。

しかし、だまされてはなるまい。

大体、まだ年端もいかぬ少年を、山中のどこともわからないところへ、葉書一枚で呼び出すというのは、怪しいかぎりではないか? こんなハガキが来たことをもし親たちが知ったら、昔も今も、都会であれ田舎であれ、だまって行かせたりするか? だからこそ一郎も、親などに知られないよう、『はがきをそつと学校のかばんにしまつて』就寝したではないか。

陣羽織を着こんで、巻煙草をくわえ、大仏さまみたいにふんぞりかえる山猫判事、異形の馬車別当、判事に不満で圧倒的な抗議のデモンストレーションをかける、黄金のドングリの群集……もし一郎が、下手な判決など提案したら、ただで済んだ

はずはない！ 結局、山猫はとがった口についた血をすましてハンケチでぬぐい、来年は別の一郎へ、おかしなはがきを出したにちがいないのである。

「狼森と策森、盗森」 東の稜^{かど}ばった山を越えて、山刀^{なた}や鋤の類をからだにしぱりつけた四人の農夫とその家族たちは、「この森にかこまれた小さな野原」にやってくる、四人の男がまわりの森たちに向かって声をそろえて次々にこう叫んだ

「ここへ畑へ起してもいいかあ」

「ここに家建ててもいいかあ」

「ここで火たいてもいいかあ」

「すこし木^{きいも}貰^{もら}ってもいいかあ」

これらは一応、「してもいいか」という、許可を求める言い方であるけれども、内実は、森たちに対する注文であったというべく、そして森たちの方は、「いいぞお」あるいは「よし」と答えて、それらの注文を受容したのであった。

しかし森たちによるこの受容は、農夫たちが必ずしも自明・当然のこととして、安心して予期していたわけではなかったことは、この返事を受けての男たちのよろこびようや、それ以上に、「さつきから顔色を変へて、しんとしてゐた」女や子どもらのはしゃぎようから、充分に推測できる。

じつさい、この注文あるいは請願と受容は、そんなに

簡単に済んでいいはずのものではなかった。この請願は要するに、永年の狩猟採集社会への、農耕民の進出という、人間文明史における重大な転機を導こうとするものであって、所によっては何年も何十年も、時によっては流血の軋轢^{あつれき}を経て推移するはずであった。

したがって森たちも、このときこそ気軽に「いいぞお」「よし」と許諾を与えてみたものの、やはりこの推移の意味するところの重大さと、取返しのがたない気がついた。あるいは子供たちをさらって、きのこ・山菜レストランで饗応しておいて食べてしまおうと考えたり、敵の武器である農具をすべて没収してみたり、相手の主要収穫物をまるごと盗んだりしてみられるけれども、いずれも他愛なく取り返されて、かわりに粟餅なんぞを贈られて悦に入るといふ、なさけないでいたらくだ。

どう考えても、農夫たちが手に入れたものと比べて、この粟餅は、中沢新一流に言えば、とほづもない非対称、不均衡である！ おまけに、この粟餅も、「時節がら、ずぬぶん小さくなつた」というではないか。

これほどの非対称・不均衡のツケが、いずれまわってくることは目に見えていた。大正末期から昭和にかけての不況、それと連鎖した戦争、敗戦。占領軍、国の「ノイ政」、減反、過疎化……おそらくこの農民たちの拓いた村はいずれ滅んで、あるいはいったん大企業により開発されてリゾート地化するかもしれないが、その企業も倒産して手を引いたあとには廃墟がこの

り、いずれ荒地となり、まわりの森たちによって再び占拠され、食われてしまうのではあるまいか。その兆候はもういたるところで見えているのである。

「水仙月の四日」 この料理店は、まず、じつにカラフルである！ メニューは「カリメラ」。

空ではお日さまが「まばゆい白い火」をしきりに焚いているのに、それには目も向けずひとりの子供が、「赤い毛布」にくるまって、ひたすらカリメラのことを考えながら「象の頭のかたちをした」丘（これは仏教の方で悪鬼の住むという）「象頭山」をふまえている（の裾をあるいている。そら、新聞紙をまいてふうふう吹くと、炭から「青火」が燃える。カリメラ鍋に「赤砂糖」とザラメを入れて、くつくつ煮るんだ……）。

この「カリメラ」というのは、私も十歳の頃いっしょけんめいつくつてみたことがあるが、じつにこれがむつかしいのだ！ 店で注文して作ってもらったのではなく、雑貨屋で買ってきた「カリメラ鍋」で、自分で作らねばならぬ。母や妹たちに注文されて、作ろうとしてみたが、ついに一箇も成功しなかった！ むきになって、やればやるほど、ぼろぼろと崩れた失敗作ばかり……。

雪嵐に襲われて倒れた子供の、赤毛布の上から、雪童子は雪をたくさんかけてやって、「あしたの朝までカリメラの夢を見ておいで」と語りかける。「カリメラの夢」とはすなわち、カリ

メラを作る夢。うまくできたら、食べることができれば、できなければ、自分が食べられてしまうのだ！

けれどこの子供は、雪童子から贈られた「やどりぎの枝」を持っていた。(注2)「赤い」実がついて、「青い」皮と、「黄いろの」心をもった小さな枝。この護符のおかげで、おそらく子供は黄泉の国の入口からぶじ戻ってくる。私たちも、カラフルなレストランへ入るときは、カラフルな護符を身に付けるように気をつけよう。

「山男の四月」 山男には、行きつけの料理店があるわけではない。

《山男は、金色の眼を皿のやうにし、せなかをかかめて、にしね山のひのき林のなかを、兎をねらってあるいてゐました。》

しいていえば、この「にしね山のひのき林」が、かれの食料入手先、あるいは、行きつけのセルフサービス食堂であって、このセルフサービスは徹底しているから、自分で食料を見つけないのなら、自分の手でそれを獲得しなければならない。

《ところが、兎はとれないで、山鳥がとれたのです。》

つまり彼が自らに注文したのはウサギであったのに、手に入ったのはヤマドリであった。しかしこの「客」は、「店主」に向かつて「これは私の注文したものではない」などと文句をつけることなく、「大きな口をにやにやまげて」喜んだので

あつた。

欲しいと思つていた獲物はとれずに、かわりに「山鳥」で満足することにした。この点で山男は、「鹿」を射ちたかつたのにかわりに「山鳥」を買つて東京に帰つたあのイギリス兵ふうの紳士ふたりと同じである。その間にあの紳士たちは、あやうく「山猫」に食われそごなつたが、山男はどうか？

山男は「支那人」の変な薬をのまされて「六神丸」に変えられたのだから、いわば漢方のインチキ薬膳料理店にひっかかつて、あやうく食われてしまつところだったのであり、やはりあの紳士たちと同断である。山男の方は結局、夢だつたことがわかつて、「あくびをもひとつ」しておさまるが、あの紳士たちの体験だつて、あれはかれらの白昼夢だつたにすぎないとも言へばいえるので、ただ山男は、「紙くづのやうになつた」顔がもとに戻らないといつような不治の後遺症に罹ることだけは免れた。これはおそらく、自筆広告文に言及のある、「一つの小さなこの種子」のおかげであつて、「この種子」は、「水仙月の四日」における「やどりぎの枝」に通じるものであろう。

「かしはばやし」の夜」 明らかに柏の木どものシンパである、あやしげな画かきに、たくみに誘ひこまれた農夫がいわば引きすえられたのは、柏の木大王とその一統にかこまれた夜の草地である。これまで98本という、なかなか多数の柏の木を伐つてきた清作が、大王に「前科九十八犯くじふはっぱん」と指弾されるのはもつ

ともなことであり、清作自身も、柏の木たちの示す敵意は「しかたない」とことと認めている。また、清作が「山主やまぬしの藤助とうすけに酒を買つてある」と主張するのに対して大王が「なぜおれには買はんか」と怒り、清作が「いはれがない」と反論し、大王が「いやある」と言いかえすのは、本来、村人が山の神に酒を献じて木を伐らせてもらつた慣習がすでに清作らのジェネレーションから失われていることを示すという赤坂憲雄説(注3)により、納得できる。

つまり、柏の木たちには、これから農夫を寄つて集つて惨殺するだけの動機と根拠があるのであつて、最後に集つてきた梟の軍隊は、自分たちの夕食として、草地を掃除して清める役割をつけもつていたと考えられる。

そんな、みもふたもないなりゆきをとりあえず和らげて、歌合戦の場に引きもどしたのは、まどかなるお月さまであり、最後の修羅場をはげしく中断してくれたのは、霧雨である。この「霧」とは、いうまでもなく「物語の言語」であつて、これによつて物語は、「読者」たちを、再びおのれの支配の下にとりもどしたのだ、と考えることができる。

「月夜のでんしんばしら」 この物語は、あまり料理店らしいところがないけれども、恭一少年がただ一度、恐怖で「歯がちがち鳴りました」といつところがある。それは、「まるでぼろぼろの鼠ねずみいろの外うしろを着て、「背の低い顔の黄いろ

なぞいさん」が、握手しようと言って恭一の手をつかんだときで、

《ぞいさんの眼だまから、虎のやうに青い火花がぱちぱちとでたとおもふと、恭一はからだがびりりつとしてあぶなくうしろへ倒れさつになりました。

「ははあ、だいぶひびいたね、これでごく弱いほうだよ。わたしも少し強く握手すればまあ黒焦げだね。》

つまりこの「電気総長」と自称するぞいさんがその気になったら、恭一はあっけなくバーベキューにされて、こま切れにして兵士たちの携行食に利用されても不思議ではなかった。それが無事で済んだについては、恭一は鉄道線路内に立ち入ったのを見付かったら罰金刑になるところだったし、電信柱の軍隊の行進も、どうやら見付かることを憚るはばか非法デモらしいから、この握手も、不法行為者同志の、友情の握手だったためだ。

「鹿踊りのはじまり」これについては別のところで書いておいた(注4)ように、栃の団子のひとかけらをめぐる鹿たちの円舞は、じつは獺の獲物とされる動物たちが逆に、獺師を包囲して襲いかかるという、ユーラシア古来の説話類型の、ひとつの転位と見る事が可能であり、「なめとこ山の熊」のラストと好一对である。この物語の華というべきは、六足の鹿が栃団子を一口づつつ食し終ったあと、順々に唱える六首の方言短歌であるが、これは他の物語では「注文の多い料理店」の扉毎の記

文や、「月夜のでんしんばしら」の兵隊たちが歌う六連の軍歌に、ちよつど、至当する。

考えてみれば、嘉十が「それ、鹿、来て喰」と言っつめばち草の花の下に置いた、この栃団子の一片は、本来、獺師が鹿をおびき寄せるための撒き餌だったはずのものであるのが、賢治作品における転位のひとつとして、逆に獺師を狩り終えた動物たちの、記念の「餐」と変じているわけで、これはまことに味わい深い。

むすび

以上、『注文の多い料理店』を、「鳥の北斗七星」を除いて(注5)逐一検討してきたところで、次の二つの結論がみちびかれる。

第一。料理店とは、客に食くべさせせると思わせておいてあるいは客に食物を提供しておいて、最終的には、客を食くべてふとする装置であること。

第二に、およそ「物語」とは、「読者」を食いものにして何百年も生きのびる「料理店」に他ならない、ということ。

注1 ついでにここで言うておくと、詩篇「永訣の朝」で詩人が、

おまへがたべるこのふたわんのゆきに

わたくしはいまころからいのる

どうかこれが兜卒の天の食に変わって

やがておまへとみんなとに

聖い資糧をもたらずことを

わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

と記している所が、『注文の多い料理店』自序のラストとパラレルであるとするれば、この詩における「ふたわんのゆき」あるいは『みぞれ』が、「永訣の朝」というこの詩篇そのものの喩であること明白である。

注2 なぜ雪童子がこのとき少年にやどりぎの枝を贈ったか、その理由を本文は明示していない。童子が少年にシンパシーを抱いていることは読みとれるが、シンパシーの徴としてやどりぎを贈ったのか、少年が枝をひろって大事そうに携行したからシンパシーを持つにいったたのか……どち

らでもあるようにも思われる。

注3 赤坂憲雄『物語からの風』（五柳書院、一九九六）、一〇頁。

注4 拙稿「なめとこ山の熊」再考の試み 《荒獺師伝承》と

賢治童話 「」『賢治研究』八〇号、一九九九年十二月、

一六（二六頁）を参照されたい。

注5 本稿では各論部分でも「鳥の北斗七星」に言及しなかつたが、じつは私が小学五年の三学期に初めて読んだ『注文の多い料理店』（昭和二十二年十月刊、杜陵書院）は、初版本の紙型を利用していながら、「鳥の北斗七星」だけは削除されていた。この削除は占領軍による検閲の結果である。この検閲理由が、今回の私の不言及と無関係でないかどうかは、さだかでない。

〔付言〕

本稿は、二〇〇三年十月四日、東京宮沢賢治研究会例会での口頭発表のためのメモをもとに、あらためて書き下ろしたものである。